先秦期に編まれた文献資料の中には、五行に関係する記述がいくつか見られる。それらは雑然としていて体系化されていない。また、「木・火・土・金・水」の五者のみだけではなく、この他に「穀」や「田」を加えて六者一組としている例も見られる。

五行の相互関係については、鄒衍の五徳終始説が五行の相勝を用いて王朝交代を説明した他に、『左伝』や『墨子』にも断片的な相勝説が見られる（ただ、それらが五行全てについて述べる説であったかは確認できない）。また、相生説については、現存する資料の中からはその明証が得られないのみならず、出土資料の中には「土生木、木生火、火生土」という土・木・火の三者間での相生が説かれた字句も見え、後代の五行相生説とは異なる説が存在したと考えられる。つまり、この時期の五行説について考える際には、後代の五行説の構造・内容に縛られず、様々な可能性を想定しながら資料に向き合わなくてはならない。

漢代の経学に於ける五行説について考察する前に、まず本章で、先秦期の各資料に見える五行に関する言説を概観する。これにより、五行が当初はそれほど整然とした体系を有してはおらず、時令や占術、正統論等の様々な分野でそれぞれ別個に発展したことを確認したい。